

どこにもない (仮題)

【登場人物】

男・・・・・・・・ユウスケ。売れない若手俳優。

インディペンデント映画『アット・ジ・エンドオ
ブ・トウキョー』でケイトを演じる。

女・・・・・・・・メグ。同映画でエリナを演じる。

撮影スタッフ・・・・・・・・『アット・ジ・エンド・オブ・トウキョー』の撮
影スタッフ

撮影キャスト・・・・・・・・同映画の出演者たち。

ミヤザキ・・・・・・・・映画『どこにもない』の監督・撮影

1 サイクリングロード

自転車漕ぐ男と女。

男は手を離して運転してみせる。

男「できる？」

やってみなよ」

女は真似して手を離してみようが、すぐにまた手を戻す。

男はそれを笑って、手を戻し、運転を続ける。

女もそれにつられて自然と笑顔になる。

2 部屋の中(夜)

男と女、それと男の友達が数人集まっている。

スピーカーから音楽が流れて、友達たちの一部が歌っている。

テーブルには料理やお酒が並ぶ。

友達1「エリナちゃんとケイトは、その、もうそういう関係？」

男「え、いや、バカ言え」

女「私の親戚を通じて知り合ったんです

私は東京に住んでるんですけど、

今は親戚の家に遊びに来てて」

友達2「東京の女かあー、どおりで綺麗なわけだ

な、ケイト？」

男は、照れくさそうに下を向いている。

女「ちよっと、やめてくださいよおー

さあさあ、お注ぎしますよ」

そういつて女は男の友達にビールを注いであげる。

女「ケイト君ものむ？」

男「あ、ありがとう」

監督「カット！」

音声「カット」

スタッフ「ホールド

シーン2 1、カット3、テイク2」

カチンコを鳴らすスタッフ。

監督「チェックします」

スタッフ「チェック」

照明や音声器具の修正をする撮影クルー。

女の髪をセットし直す衣装スタッフ。

男はチェックに向かう。

監督「オッケー」

スタッフ「オッケーです

では、本日の撮影は終了です。

撮影初日、お疲れさまでした！」

キャスト「お疲れさまでしたー」

片付けに入るスタッフたち。

男は窓のある方へ向かい、煙草に火をつける。

女「お疲れ様ですー」

撮影期間長いですが、どうぞよろしくお願いします

・・・なんてね

まさか同じ映画に出ることになるなんて思ってたわ

男「うん、相手役が君だと知ったときは驚いたよ」

女「・・・久しぶりね」

男「二年前、駅のホームで君を見送った以来かな

いや、その後にも会ったんだっけ？僕たち」

女「会ったじゃない、あの公園で

あなたがどうしても会いたいわって言ったのよ、覚えてないの？

そのくせ、会って話といえ

これといって大したことのないものばかりだった

・・・まあそんなことどうだっていいわ、よろしくね」

その場を離れる女。

男はそれを見送り、再び煙草を吸う。

3 湖

それぞれスタッフが自分の持ち場の準備をしている。

これから撮影するシーンの動きを男と女に説明するスタッフ。

スタッフ「湖のほうにむかっていく女を男が追って

・・・ここで男さんのセリフです

そのあとで、セリフを遮るように女が男にキスをしてセリフです」

スタッフの言う通りに動いて演技の確認をする二人。

スタッフ「オッケーです

では、そんな感じで」

ふたりは離れて、演技を始める位置へ移動する。

監督「じゃあ、本番！」

スタッフ「本番！」

監督「用意、スタート！」

湖のそばの歩道、歩く女の少し後ろを歩く男。

女「本当にいいところだね、ここは」

男「・・・」

女「東京にもこんなところがあればいいのになあ

でも、もしそうなら、もうそこは東京じゃないね」

笑顔で男の方を見る。

男「あ・・・あのさ、東京には・・・いつ戻るんだっけ？」

女「あさってだよおー」

男「えっ・・・あ、そうなんだ」
女「そうなんだよおー」

女は男の方を向かずに笑顔で答えて、走っていく。
それを追いかける男。

女「富士山の見える湖のすぐ側まで来たふたり。
東京の外に出てみてさ、見つかるかなーとか思ったんだよね
わたしが本当に好きなものとか、これからどうしたいかとか
でも結局・・・お父さんとかお母さんとか、会社の上司とか
そういう人に象られたわたしからは抜け出せないんだなあって
ああ、私、どんな顔して東京で生きてたんだろう！」
後ろから男が言う。

男「あのみさ！」

男の方を振り向く女。

男「いや・・・あの・・・もう少しここにいなよ
いや、その別にこっちで暮らしてほしいとか
そういうことじゃないんだけど
でも、もう少し一緒に・・・どこか行ったりしようよ
あ、そうだ！」

じいちゃん家の近くにボートに乗れるところがあったさ、
子どもの頃よく遊んだなー
そことかさ・・・」
女が男の頬にキスをする。

女「ありがとう、じゃあまた明日、出発する前に寄るね」
去っていく女。
その背中を見つめる男。

監督「カット！」

しばらくそのまま動かない男。

4 どこか外（未定）

手持ち花火をする男と女。

男「年は？いくつ？」

女「二十歳、そっちは？」

男「十九」

次々に花火に火をつけていく。

女「なにやってる人なの？」

男「え、なにって？」

女「仕事とかさあ、学生です！とか」

男「ああ、親父がやってる店で働いてる」

女「店って？何屋さん？」

男「いや、」

5 自動販売機の前（深夜）

女「いやってなによ」
男「なんでもない」
女「えー、教えてよー、なんで隠すの？」
男「ほら、線香花火しようよ」
女「もー」
ふたりはしゃがんで線香花火を始める。

女が自動販売機で飲み物を買う。
飲み物を取り出し、座って飲む。
男が煙草に火をつけながら出てくる。
男「あ」
女「眠れなくてね」
男「僕もだよ、暑いし」
男は女の隣に座る。
しばらく沈黙するふたり。
男「ねえ、少し歩かない？」
女「いいわよ」

6 湖（深夜）

湖の側の歩道をふたり並んで歩く。
男「メグ、元気だった？」
女「まあそこそこね、そっちは？」
男「メグと別れてからは舞台やったりもして、すごく忙しくってさ
まあ望んでそうなったのかもしれないけど」
女「なによそれ」
女は少し笑う。
無言でしばらく歩くふたり。
撮影をしたあたりまで歩いてくる。
女がふざけて演技をする。
女「私、どんな顔して東京で生きてたんだろう！』！」
男が呼びかける。
男「メグ」
女「わたしはエリナよ」
女が笑って男の方を向く。
男「メグ」
女「・・・なに？」
不機嫌な顔をする女。
男「僕、あれから少しは変わったと思う
・・・前より人前で演技できる機会も増えたし

7 どっかの道（未定）

監督「用意、スタート」

男が自転車を押しながら道路沿いを歩いている。
後ろから追い越そうとした車が男の側で停止する。

親戚「ケイト！」

ほらやっぱりケイトじゃねえか、久しぶりだな」

男「リョウタ兄ちゃん！」

どうしたの？東京で就職したんじゃないっけ？」

親戚「長い休みが取れたんだ

ほら、こいつがガキの頃からつるんでたっていうケイトだよ」

親戚は助手席に乗る女に男のことを紹介する。

女「こんにちは、はじめまして」

男は軽く会釈をして、親戚の顔を見る。

親戚「ああ、この子はエリナ」

男は分かったようにうなづく。

親戚「違えよ、俺のいとこなんだ」

男「ああ、ごめんごめん」

男は笑いながら謝る。

親戚「近いうちにメシでもつれてってやるよ

じゃあまたな、ケイト」

男「おうよ」

車はまた走っていく。

8 車内

女「こうして映画にも呼ばれるようになった」

男「演じてばかりね」

男「だから・・・その・・・」

あの頃よりも、もっと君の考えていることを

分かってあげられると思うんだ」

女「あの頃もあなたは分かるうとしてくれたわ」

男「メグ、好きだよ」

女は表情ひとつ変えず笑っている。

女「なにを馬鹿なこと言ってるのよ

さすが演技がお上手ね」

男は驚いて黙っている。

女「・・・もういくね、またあとで」

男は過ぎていく女の背中を見つめている。

朝日が昇り始めて、あたりは薄明るくなっていった。

ふたりが車に乗っている。
その後ろの座席にも何人か座っている。
沈黙だったり、会話をしたり。

9 富士山が見える綺麗なところ（未定）

ふたりは車から降りる。

スタッフ 「しばらくお待ちください」

男が女に話しかける。

男 「昨晚は・・・ごめん」

女 「なにが？」

男 「いや、その・・・」

（カメラを向いて）セリフなんだっけ？」

ミヤザキ 「君ともう一度・・・」

男 「ああ（女の方を向いて）

やっぱり、君ともう一度分かり合いたいんだ

今ならきつともっと上手に・・・」

女が遮るように言う。

女 「無理よ、それは無理なの」

男 「どうして！僕はこんなに君のことを思っているのに」

女 「無理よ」

あなたとわたしが、あなたとわたしである限り

お互いを理解しあうなんて不可能なのよ」

男 「じゃあどうすれば僕と君が、僕と君から抜け出せるんだ！」

女 「抜け出す必要なんてないわ

演技をするのよ、（カメラを向いて）こうやってね

ここにいるけどいけないような、私だけど私でないような

そんなアンバランスな時間が一番幸せじゃない？」

男は黙って女を見つめる。

スタッフ 「すみません！

ケイトとエリナ、こちらにお願いします！」

スタッフに呼ばれる二人。

10 部屋と森と湖

男が湖に飛び込む。

部屋で女が座って笑っている。

森で男と女が追いかけてっこしている。

部屋で男が苦悩している。

11 駅前

男「じゃあ、元気でね・・・」

女「うん、それじゃ」

駅の方へ歩いていく女と、それを見送る男。

監督「カット！」

女が戻ってくる。

女「なんか笑っちゃいそうになった」

男「なんでだよ」

女「だって、めっちゃ悲しそうじゃん」

男「いい演技だった？」

ミヤザキ「すげえよかった」

カメラがぶれて音声にノイズが入る。

〈終〉